

# 評価述語の規範的偏向とアイロニー

大久保 朝 憲

はじめに

本稿は、「よい／わるい」「おいしい／まずい」「たのしい／くるしい」など、事態の規範的な評価にかかわる述語の対義語ペアにおける意味的偏向をてがかりにして、この規範的偏向が、とりわけアイロニーの理解や成立過程におよぼす影響について論じるものである。

「規範的偏向 normative bias」とは、Wilson & Sperber (2012), Wilson (2014) などによって、アイロニーにみられる偏向として報告されており、これらの研究では、関連性理論のエコー的解釈による従来の記述方法にのっとって、この偏向が説明されている。本稿筆者は、アイロニー、緩叙法、婉曲語法、からかいといった文彩による発話を、Carel (2011a, 2011b) などにもとづき、Carel の提唱する意味ブロック理論 *La théorie des blocs sémantiques* および論証的ポリフォニー理論 *La théorie de la polyphonie argumentative* の理論的装置に必要な修正をくわえて援用し、記述の道具としてきた (大久保, 2016 など)。本稿は、その記述法を踏襲しつつ、アイロニー発話内の述語の意味的性質が、上記の規範的偏向と平行した意味論的現象であることを確認し、規範的偏向が、アイロニーの記述にかざらない、発話一般にみられる現象であることを確認する。

アイロニーは古典的な修辞学や、一般的な理解においても、「いっていることとは逆のことをつたえることで、あいてを批判・非難すること」といった特徴づけがなされる。これをかりに、アイロニーにおける「反意誘引説」となづ

けよう。この反意誘引説による特徴づけは、典型的なアイロニーについては有効なものとおもわれるものの、このような特徴づけにまったくなじまないタイプのアイロニーも簡単にみつけることができることから、多くの先行研究によって批判されてきた。本稿では、規範的な評価にかかわる述語の反意語ペアにおける意味的偏向が、アイロニーにおける規範的偏向とリンクする問題であり、またこの偏向によって、典型的なアイロニーが反意誘引型であると理解されることがおおいのはなぜかということについて論じる。

## 1. 評価的発話にみられる意味的偏向

### 1.1. 評価的発話と確認的発話

発話には、とりわけ述語の性質によって、話者による事態の評価を意味的にあらかじめふくんでいるものがある。

- (1) バラク・オバマは大統領である。
- (2) バラク・オバマは民主党に所属している。
- (3) バラク・オバマは礼儀をわきまえている。
- (4) バラク・オバマは黒人大統領である。

うえの4つの例のうち、本稿では(3)が典型的にその性質をもっており、これを「評価的発話」とする。これにたいし、(1)、(2)は通常評価的発話ととらえられることはない。これらの発話は、話者がなんらかの事態をみずからの観点でとらえたものとしてのべたものではなく、主語「バラク・オバマ」の社会的地位、所属政党について、話者が自身の知識にもとづいて事実とみなすことがらを確認するものとしてのべられたものである（「確認的発話」）。評価的発話と確認的発話を簡易に区別する手段としては、その発話への反応として「わたしもそうおもう」という返答ができるかどうかというテストに依拠することを提案する。(3)の発話への反応として「わたしもそうおもう」とかえすことは可能であるが、(1)、(2)にたいしてそのようにかえすことは原則としてでき

ない<sup>1)</sup>。(4)のような発話は、オバマ氏が大統領選挙に当選した際に、「初の」という修飾語句をとまって、しばしば報道メディアでもなされた発話である。このような発話は通常評価的な発話であるとはとらえられないが、単純にかんがえても、いわゆる黒人の父親と白人の母親を両親とするひとを「黒人」としてしまうのは、人種差別的偏向によるものであることはあきらかである<sup>2)</sup>。本稿で論じる、評価的発話にかかる偏向の影響を、こうした発話はつよくうけているということを後述の議論のなかでしめしたい<sup>3)</sup>。

## 1.2. 評価的発話の二分類：規範的评价と中立的評価

評価的発話には、これも主として述語の意味的性質によって、その評価に規範的な価値づけ（「のぞましい／のぞましくない」<sup>4)</sup>）がなされるばあいと、そのような価値づけがなされないばあいがある。前者を「規範的评价発話」後者を「中立的評価発話」とする。両者の区別は、述語が意味的に規範性をもつ（規範的评价述語）かそうでないか（中立的評価述語）によって判断することができる。規範的评价述語とは、「よい／わるい」「うつくしい／きたない」「正直／うそつき」などのように、それぞれの語の意味に規範性がふくまれているもののことで、これらを述語にふくむ発話は、これらについての日本語の知識のみで、規範的评价発話と判断できる。

(5) {うつくしい／きたない} へやをみて、{いい／わるい} 気分になる。

(6) {正直なの／うそつき} は {いい／わるい} ことだ。

これにたいして中立的評価述語は「ながい／みじかい」「たかい／ひくい」「おおい／すくない」など、その単語の意味だけでは、評価に規範性が生じない述語のことである。

(7) この川はとても {ながい／みじかい} ことで、有名である。

(8) この草原には、たけの {たかい／ひくい} <sup>5)</sup> くさがしげっており、うつく

しい景観をもたらす。

(9) えきまえひろばのひとつが {おい／すくない} ので、気分がいい。

(7)-(9)の発話では、述語の意味そのものからは発話が主張する規範性をよみとることができず、基本的には中立的評価発話をうみだす述語となっているが、文脈が規範性を決定するばあいもあり、そのばあいには中立的評価発話にも規範性が表出する。

(10) 徒歩のみちのりが {ながい／みじかい} ので、{つかれる／楽である}。

(11) 背が {たかい／ひくい} ので、視界がさえぎられ {にくい／やすい}。

(12) 値段のわりに量が {おい／すくない} ので、{お得／損} です。

以上のことは、以下のように表にまとめることができる。

表1：発話の評価性

			規範性の表出
評価的発話	話者による事態の評価を意味的にふくむ発話	規範的評価発話 (規範的評価述語による)	文脈フリー
		中立的評価発話 (中立的評価述語による)	文脈に依存 <sup>6)</sup>
確認的発話	話者が事実とみなすことがらを確認するものとしてのべられた発話		

### 1.3. 規範的評価述語の対義語ペアにおける意味的偏向

上記のように、発話の規範性には、規範的評価述語によって文脈にかかわらず成立するばあいと、中立的評価述語が文脈にサポートされて成立するばあいがあるが、前者の規範的評価述語の対義語ペア（の否定）には、意味的偏向があることをこれまで指摘してきた（Okubo, 2008）。また、これについては、Ducrot（1973: 125）にすでに明示的な指摘がある。

「反意関係の形容詞のペアをつくる2語に対して、否定は対称的なふるまいをみせない。『やさしい／いじわるい』というペアをかんがえてみよう。『ピエールはやさしくない』という発話は、しばしば『ピエールはいじわるい』に非常にちかい。これに対し、『ピエールはいじわるくない』は『ピエールはやさしい』に等価というにはほどとおい<sup>7)</sup>。」

また、Ducrot はこれにつづけて、このような偏向がみられるのは、否定が記述的否定 *négation descriptive* であるばあいのみであり、論争的否定 *négation polémique* のばあいはあてはまらないことを指摘している。記述的否定とは、事態の記述そのもののために使用される否定で、論争的否定とは、先行文脈内に現実の、もしくは想定されるものとして肯定の発話があり、それに対する反論 *réfutation* として述語が否定の発話におかれることである。後者のばあいについての Ducrot (*ibid.*: 126) の例はつぎのようなものである。

(13) — Pierre est gentil. (ピエールはやさしい。)

— Non, il n'est pas *gentil*, mais il n'est pas non plus méchant.

(いや、やさしくはない。まあいじわるくもないが。)

記述的否定と論争的否定のちがいを明確にしめすために、以下の(14)、(15)をみておこう。(14)の下線部は、その対義語による「まずかったよ」にほぼ等価の発話であるが、(15)では、これはあいての「おいしかったでしょう」に反論するために述語「おいしい」を否定しており、典型的な論争的否定となる<sup>8)</sup>。

(14)「あのレストランどうだった？」

「おいしくなかったよ。」(≡「まずかったよ。」)(記述的否定)

(15)「あのレストラン、おいしかったでしょう？」

「いや、おいしくはなかったな。まずいとはいわないけど。」(論争的否定)

Ducrot (*op.cit.*) では、さきの引用のように、このような偏向は、「反意関係の形容詞のペアをつくる2語」にみられることとつながっているが、実際には、規範的評価述語である対義語ペアに限定される<sup>9)</sup>。以下の例は、いずれも記述的否定の発話としてのべられたものとする。

(16) 規範的評価述語の対義語ペア

- a. ??そのレストランは、おいしくはないが、まずいというわけでもない。
- b. そのレストランは、まずくはないが、おいしいというわけでもない。

(17) 中立的評価述語の対義語ペア (文脈の影響をうけないケース)

- a. その川は、ながくもないが、みじかくもない。
- b. その川は、みじかくもないが、ながくもない。

(18) 中立的評価述語の対義語ペア (文脈で規範的評価発話となるケース)

- a. そのみちのりは、みじかくはないが、ながくもないので、そこまでつかれない。
- b. そのみちのりは、ながくはないが、みじかくもないので、そこそこつかれる。

(16)と(17)をみくらべればわかるように、偏向が生じるのは、規範的評価述語の反意語ペアのうちの優位評価述語の否定のみである。「おいしくない」という否定述語は、中間段階を超越して「まずい」の意味にちかづくのはDucrotも指摘するとおりである。他方、中立的評価述語では同様の現象はおこらず(17a, b)は、たがいにほぼ同義の発話として、問題の川のながさが「中ぐらい」であることをのべた発話となっている。また(18)では、文脈によって「みじかい」が優位の評価述語、「ながい」が劣位の評価述語になることで、規範的評価発話が成立している例であるが、(16a)に比して、(18a)の理解が正常になされうることから、問題の意味的偏向は、語彙的に規範性をもつ規範的評価述語

に限定される現象であるということができる。

つぎの章にうつるまえに、ここで確認した言語現象の一見反例ともみえる事例についてのべておきたい。以下の発話の述語は、規範的評価述語と判断できるものであるが、その否定において同様の偏向が観察されない。

(19) ぼくは聖人君子じゃない、しかし悪人というわけでもない。

(20) この料理は絶品ではない、しかしまずいというわけでもない。

(21) くもひとつない空ではない、しかし悪天候でもない。

「聖人君子」と「悪人」, 「絶品」と「まずい」, 「くもひとつない空」と「悪天候」は、たしかにおなじ意味階梯上にならぶ対義的要素ということではできるが、反意語のペアを構成する2要素といえるものではない, 「悪人」には「善人」, 「まずい」には（すでにみたように）「おいしい」, 「悪天候」には「好天」といった反意語があり、それらについては、これまでと同様の偏向を観察することができる。

(22) ?? ぼくは善人じゃない、しかし悪人というわけでもない。

(23) ?? この料理はおいしくない、しかしまずいというわけでもない。

(24) ?? 好天ではない、しかし悪天候でもない。

つまり、規範的評価語の優位要素がかならずしも上記でみた意味的偏向現象の対象になるわけではなく、優位性が極端であることが含意されるような要素のばあい、否定がその極端さのみにかかることによって、(19)-(21)のような発話の自然さが保証されることになる。この極端さを削除した(22)-(24)の不自然さが、このことを裏面から根拠づけている。

ところで、(19)-(21)でいまみたことから、しかるべき意味的「乖離」が確保されれば、意味的偏向は解消されるのだと判断できるとすると、規範的評価の劣位要素に「極端さ」を含意するものをあてれば、同様の結果を期待するこ

とができる。

(25) ぼくは善人じゃない，しかし極悪人というわけでもない。

(26) この料理はおいしくない，しかしどうにもたべられないしろものでもない。

(27) 好天ではない，しかしどしゃぶり雨でもない。

要するに，(19)-(21)，(25)-(27)の例は，いわゆる「部分否定」の効果によって，偏向をまぬかれているということができよう。

#### 1.4. 「黒人」は劣位の規範的評価述語である

以上を確認したうえで，さきの(4)の例にたちかえて検討してみたい。議論をみえやすくするために，以下の(28)は，オバマ当选時にしばしばメディアの報道にみられた「初の」をおぎなったものとする。

(28) バラク・オバマは初の黒人大統領である。

すでにのべたように，「黒人大統領である」と述定することは，（「黒人」の概念に客観的な定義ができるという前提で）本来事態についての話者の評価をふくむものではなく，確認的発話の事例であるはずである。しかしながら，オバマが「黒人」ではないこと（そしてまた「白人」でもないこと）はすでにみたとおりであり，そのことから，この発話は，比喩的発話にみられるように<sup>10)</sup>，本来確認的発話ととらえられる述定が，評価的発話としてのべられているケースとかんがえることができる。

(29) a. バラク・オバマは，アメリカ民主政治の希望の星である。

b. 地球は，太陽系で太陽から3ばんめにちかい星である。

うへの2つの発話は，ともに「星である」という述語をしたがえているが，(29b)



が確認的発話であるのに対し、(29a)は「星」がとりわけ「希望の」をともなうて比喩的な意味をもつことで評価的発話となっている。これと同様に、(28)では、「黒人」が客観的事実と異なる以上、これをふくむ「初の黒人大統領である」という述定は話者の評価によるものであり、(28)は、評価的発話であると判断しなければならないことになる。

つぎに、(28)は規範的評価述語をともない、述語の意味そのものによって、文脈のたすけをかりずに規範的評価発話と判断されるものか、あるいは、中立的評価述語をふくむ発話が、文脈のサポートをうけて規範的評価発話となったものと判断されるものかという問いが生じる。オバマを「黒人」という背景には、「白人」「黒人」の区別をするための One-drop rule が適用されている。白人の血のなかに、一滴でも黒人のそれがまじっていれば、白人ではなく黒人となるというかんがえかたで、米国では社会的にそのように認識されていただけでなく、法的にもそのような規定がされていた。この One-drop rule は、3章でみた規範的評価述語の対義語ペアにみられる意味的偏向とほぼ平行した規則である。「白人／黒人」という対義語ペアでは、「白人」は100%の「白人性」をもっていなければならず、そうでなければ、つまり100%の白人性が否定されれば、すなわち「黒人」と判断される。また、これも One-drop rule からみちびかれることであるが、「黒人」は100%の「黒人性」をもっている必要はなく、100%の「黒人性」は「黒人」であるために要求されることではない。したがって、このルールをベースにすることで、以下のような発話についての判断が根拠づけられる。

- (30) a. バラク・オバマは白人ではない、つまり黒人である。  
 b. \*バラク・オバマは黒人ではない、つまり白人である。

これを、典型的な規範的評価述語の例とひきくらべてみよう。

- (31) a. この料理はおいしくない。つまりまずい。

b. \*この料理はまずくない。つまりおいしい。

このように, one-drop ruleに依拠することで, 本来評価述語でないはずの「白人」「黒人」という語が, 規範的评价述語とおなじようにふるまうことをみてとることができる。そして, (28)の発話の容認性をささえるのは(30a)の発話であるということもわかる。つまり「黒人」の語が差別的であるとされるのは, この語形のもつ字義でもなく, また one-drop rule による規定にしたがって定義されるからという理由だけではなく, one-drop rule をベースにした意味的特徴が「黒人」の語に付与され, それが規範的评价述語のペア「白人／黒人」における劣位の要素として, 日本語話者にさえ共有されているという事実によるものである。

## 2. 規範的评价述語とアイロニー

### 2.1. アイロニーにおける規範的偏向 (Wilson 2014)

前章でみた, 規範的评价述語にみられる意味的偏向と関連づけられるとかんがえられる現象として, アイロニーにおける規範的偏向に注目する必要がある。ここで紹介するこの現象と, 前章で確認したことをむすびつけてかんがえることで, アイロニーの典型例がなぜ反意誘引型のそれなのかということについて明確な根拠を指摘することができるからである。

アイロニーにおける規範的偏向については, アイロニーの重要な特徴として, Wilson & Sperber (2012), Wilson (2014) などで論じられている。ここでは, 後者の議論の概要を紹介する。「規範的偏向 normative bias」とは, 典型的なアイロニーについての修辞学的研究でよくいわれてきたことで,

「アイロニーとは通常, 当該の状況, できごと, 行為が, なんらかの規範にもとづいた期待にそぐわないばあいの批判や不満をのべるために使用される。(中略) アイロニーが称賛や安心, もしくは規範的な内容が欠如しているなんらかの命題が偽であることを指摘するために使用されるのは,

特殊な環境下にかざられる。したがって、ある友人がひとをうらぎったときに、『そのひとはとても信頼できるひとなんだ』をアイロニー的に行うことはつねに可能だが、友人が約束をまもったときに『そのひとはきわめて信用のおけないひとなんだ』とアイロニー的に行うことができるのは、その友人の信頼性について、なんらかのまえもっての疑問が提示されている**ばあいのみ**である<sup>11)</sup>。』

つまり、悪天候にみまわれたときに「なんていい天気」とアイロニー的に発言するために、文脈のサポートは必要ないが、好天にめぐまれたときに「なんてひどい天気」と発言してこれをアイロニーとして理解させるためには、だれかがその日の悪天候を予想し、そのように発言していたといった文脈にささえられている必要があるということである。

## 2.2. 規範的偏向と発話そのものの評価性との関連性

このことを、1章でみた述語の評価性、規範性といった性質のちがいにもとづいて、もうすこしくわしく考察してみよう。Wilson の指摘をきめこまかくみなおしたうえで、これを本稿の用語法でいいおすと以下ようになる。まず、発話が規範的評価述語をふくむ**ばあい**に、優位の評価述語による発話でアイロニー的に批判や不満をのべることは、文脈のサポートなしに可能であるが、批判や不満をのべるアイロニーの**ばあい**でも、それが中立的評価述語による発話の**ばあい**には、文脈のサポートが必要である。

(32) きょうは最高にいい天気だ。

(33) なんて誠実なおとこなんだ。

(34) とてもながい小説ですね。

(32)、(33)は、それぞれ悪天候、不誠実なおとこについてのアイロニー的発話として容易に成立するが、(34)が批判的アイロニーとなるためには、この発話

にさきだって、問題の小説が、実際には短編にちかいながさのものであるにもかかわらず長編である<sup>12)</sup>、といった発言をしていた、などといった文脈があり、その発言者へのアイロニーとしていわれている、といった文脈のささえが必要である。

つぎに、劣位の評価述語による発話でアイロニー的に称賛などをのべるときも、やはり同様の文脈のささえが必要である。

(35) きょうは最悪の天気だ。

(36) なんて不誠実なおとこなんだ。

(34) 同様、(35)、(36)がアイロニーとして成立するためには、このような内容についての予測があったといった文脈上のささえがなければならない。

ところで、アイロニー的な発話では、発話そのものが批判性等をもてばよいのであって、発話の命題内容にかならずしも評価述語がふくまれる、評価的発話である必要はない。確認的発話でも、文脈のささえがあればアイロニーとして成立するばあいがある。

(37) (ジャン＝リュック・) ゴダールは、たしかにスイスうまれだね。

これはひとの出生地についての確認的発話であるが、ゴダールはフランス、スイスの二重国籍をもち、スイスを活動の拠点にしてもいるものの、出生地はパリである。それでもスイスうまれであることをつよく主張するものをふくむ議論があらかじめなされたうえで、事実が確認されたときに、アイロニーとして(37)のようにのべることは可能であるが、このような文脈がなければ不可能である。

以上のことは表2のようにまとめることができる。

表2：発話のタイプとアイロニー成立のための規範的偏向

評価的発話	規範的	優位述語による批判的アイロニー	文脈フリー
	評価発話	劣位述語による称賛的アイロニー	文脈に依存
	中立的評価発話		文脈に依存して述語に規範性があたえられ、アイロニーとして成立可能
確認的発話			

これをみてわかることは、Wilson による規範的偏向は、規範的優位述語による評価的発話が、文脈フリーで批判的アイロニーとして成立することの特権性をあきらかにしたものにすぎないということである。ほかのすべてのアイロニーのタイプは、批判的なものであれ、称賛的なものであれ、文脈のささえによって、いわば「期待された事態」の想定がなされ、それがそのとおりに実現しなかったときに、それがよいものであれわるいものであれ、その事態に言及することでアイロニー性があらわれるというものである。

この規範的偏向について、Wilson (*ibid.*) は、この現象の実験的根拠となるいくつかの研究を紹介したうえで、すこしながくなるが、以下のような説明をあたえている。

「エコー的記述が、シンプルで納得しやすい説明を提供する。規範とは、ものごとがどのようなべきかということについて社会的に共有された観念のことである。わたしたちは、ひとは親切で、協力的で、かっこよくて、信頼できるべきであり、政治家はうそをいうべきではなく、行動はそのゴールに到達すべきであり、天気はいいほうがよくて、といったことをみなしている。そこで、特定のできごとや行為が、規範をまもることができないときには、アイロニー的に『それはありがたい』『なんてすてき』『よくやった』『すばらしい天気』などといって、そのとおりにされるべき規範に基づいた期待へのエコーであると理解されることがつねに可能である。これとは対称的に、親切にされて『そんなことをされてはこまる』、すばらしいみなのひとに『ひどい格好だ』（中略）などとアイロニー的

にいうことはつねに可能なことではない。これらのケースでアイロニーが成立するためには、当該人物がこまったことをする、ひどい格好をする可能性があったという明白な疑念がなければならないのだ。そうでなければ、話者がアイロニーとしてエコー的にのべていると理解される思考がどれかわからないということになってしまう。エコー的記述であれば、この規範的偏向がアイロニーに内在的なもので、はじめからそこに存在すべきものであることがみとおせる（後略<sup>13)</sup>。」

本稿での発話・述語の規範性という観点からの規範的偏向の分析と、Wilson の上記の考察を比較検討すると、以下のようにいうことができる。Wilson 流の解釈では、アイロニーとは、想定され、文脈上につよく存在する事態にたいして、それをエコー的にくりかえすことで話者の一歩しりぞいた態度をしめそうとするものである。このとき「想定され、文脈上につよく存在する事態」とは、文脈を構成してきたディスコースのちからや、そのばの状況などによって活性化されるばあいがほとんどであるが、その発話が規範的評価語にうったえた明示的な評価的発話であり、かつ優位の述語によって批判的アイロニーの発話がなされるばあいにきぎっては、上記の「想定」が文脈上で活性化されている必要がない。その理由は、Wilson によると上記のとおり、規範というものが、基本的に本稿の用語では優位の評価述語で表現されるもの（cf. 「ひとは親切で、協力的で、かっこよくて、信頼できるべきであり」）によってなりたっていることによる。そして、本稿ではこのことについて、優位の規範的評価語がもつ、前章でみた性質と関連づけることができるものであるとかんがえる。このことについて次章で検討する。

### 3. 意味ブロック理論・論証的ポリフォニー理論による アイロニー記述と規範的偏向について

ここからしばらく、本稿筆者がアイロニーの記述のために依拠している2つの言語理論のわくぐみを紹介しながら、それらによるアイロニー記述の実際を

しめしたうえで、1章でみた規範的評価述語の規範的偏向、アイロニーにおける規範的偏向が、それらとどのように通底しているかということについて論じる。

規範的偏向が観察されるアイロニー発話の事例は、悪天候時に「いい天気」というような、「実際とは逆のことをのべる」というアイロニーの反意誘引性についての古典的な説明が適用できるものに顕著である。これについて、上記で引用した Wilson も、また本稿でも、これをアイロニーの定義としてはみとめない。冒頭でものべたように、本稿筆者は、これまで Carel (2011a) などで提唱されている意味ブロック理論 *théorie des blocs sémantiques* (TBS)・論証的ポリフォニー理論 *théorie argumentative de la polyphonie* (TAP) に、必要とみとめる改良をくわえながら、アイロニーや緩叙法、婉曲語法、からかいといった発話の分析をおこなってきた（大久保, 2016など）。そこでの議論の概要をまとめると以下の3.1-2.のようになる。

### 3.1. 意味ブロック理論におけるアイロニー：論証局面の不合理な具体化

まず意味ブロック理論の観点からかんがえる<sup>14)</sup>。この理論では、すべての発話には論証性があるものとし、2つの言語要素をむすびつける2種類のコネクタ（「だから」「なのに」）によって、[XだからY], [NEG-XだからNEG-Y], [XなのにNEG-Y], [NEG-XなのにY]（“NEG”とは否定もしくはそれに準じる要素）という4つの論証局面 *aspect argumentatif* がブロックになって、発話の意味を構築するとしている。論証局面とは、具体的な統語・語彙形式から独立した、発話の抽象的類型のことで、たとえば、かりに {おいしい食事だから 食欲増進} とでもラベル化できる論証局面に対しては、以下のような（そしてそれ以外にも）さまざまな発話がその具体的実現となる。

(38) 北陸はコメがうまいから、ついついおかわりしちゃうよ。

(39) 夏こそ、おいしい料理をつくって、たくさんたべないとね。

(40) 食事がうまかつくれたときは、この子たちは大抵全部たべる。

アイロニー的発話もまた、なんらかの論証局面の具体化であるが、その具体化のしかたが、(38)-(40)でみたように合理的なものではなく、不合理なものであるとするのが、ブロック意味論でのアイロニーの理解である。

(41)おいしそうな親子丼ですね！ありがとうございます。箸があればなおいいのですが。

この発話は「幸福要因の追加 だから 幸福感増加」とでもなづけられる論証局面の具体化とかがえられる。通常この論証局面には以下のような発話がむすびつけられる。

(42)ここの鰻丼はうまいよ。肝吸いと一緒にたべるとさらにうまい。

(43)無事合格しただけじゃなくて、主席合格で特待生だってね、よかったね。

(44)東京でのすまいを提供してくれたうえに、格安の家賃でかしてくださるそうです。ちゃんとお礼をいってくださいね。

(41)で、「おいしそうな親子丼」は幸福要因で、「箸」も食事を可能にするものとしては追加される幸福要因なので、この発話は、「体裁」としては、(42)-(44)の例と同様に、論証局面「幸福要因の追加 だから 幸福感増加」の具体化例ととらえられる。にもかかわらず、(41)がアイロニーとなるのは以下の事情による。「幸福感増加」のためには当初段階ですでに（小規模な）「幸福」（「鰻丼」「合格」「すまいを提供」）が成立しており、追加された要因（「肝吸い」「特待生」「格安の家賃」）は、その当初幸福への「オプション」として追加されたものである。そういう事態を「なおいい」「さらにいい」とのべることで、通常の合理的な発話が構成されるが、(41)のばあい、「親子丼」はたしかに当初段階での「幸福」要因ではあるものの、「箸」はその当初幸福へのオプションではなく必須要素、つまり「さらにあればなおいい」ものではなく「なくてはならない」ものである。たとえばこれがそば屋の店員などにたいしていわれたもので



あれば、当然提供すべき必須のサービスが欠如しているのに、それをオプションとみなした論証局面のなかで具体化することが、不合理な具体化をもたらし、批判的アイロニーが成立することになる。

### 3.2. 論証的ポリフォニー理論におけるアイロニー：受諾されない意味内容

Carel の言語理論の中心は前節でふれた意味ブロック理論にあり、当初これと理論的双璧をなすものとされた論証的ポリフォニー理論は、現在では放棄されてしまった（個人談話）。本稿筆者も論証的ポリフォニー理論を援用した現象の分析をすすめてきたが、最近（大久保、2016）では、この理論のなかで「テキスト機能 *fonction textuelle*」とよばれる概念に修正をくわえ、これを「発話モード」とよびかえて分析に利用している。「発話モード」とは、ある特定の意味内容をふくみもつ文が、実際の発話としてディスコース上にのせられる際に、話者がその内容についてどのような態度をどの程度のつよさでもっているかということを概念化したものである<sup>15)</sup>。発話モードには、Carel のテキスト機能に準じて、「受諾 *prise en charge*」, 「排除 *rejection*」, 「承認 *accord*」の3つのものがあるとする。

「受諾」と「排除」は対概念で、発話の意味内容を話者がひきうけ、その内容をディスコースの前面に位置づけ、その内容がディスコース内でもちうる論証的方向性にしたがって（それが属する論証的局面を具体化することで）ディスコースが展開することをみとめるばあいには「受諾モード」、発話の意味内容を話者が拒絶し、その内容がディスコース内でもちうる論証的方向性にしたがってディスコースが展開することをみとめないばあいには「排除」の発話モードがあたえられる。肯定の平叙文・否定文による発話のペアが、受諾モードと排除モードの典型である。

(45) きょうの午後はあめがふるから、かさをもっていきなさい。

(46) きょうの午後はあめがふらないから、かさはいらないよ。

論証的ポリフォニー理論の基本的な発想は、ひとつの発話は、通常かんがえられているように唯一の話者によるものだけではなく、そこに複数のこえが介在するばあいがあるとするものである。否定文による発話はその典型で、否定の発話は、肯定の発話よりも理論的に複雑な構造をしているととらえられている。(45)の肯定の発話の前半部分では、[きょうの午後はあめがふる]という意味内容に受諾モードがあたえられてディスコース上にのせられている、単純なプロセスだが、(46)の否定の発話の前半部分は[きょうの午後はあめがふる]という意味内容に排除モードをあたえ、NEG- [きょうの午後はあめがふる]を受諾モードでのべたものとするのがこの理論による否定発話の記述である。

(47) (45)の論証局面

[きょうの午後はあめがふる] (受諾) だから [かさが必要] (受諾)

(48) (46)の論証局面

[きょうの午後はあめがふる] (排除) だから [かさが必要] (排除)

NEG- [きょうの午後はあめがふる] (受諾) だから NEG- [かさが必要] (受諾)

3つめの「承認」とは、「受諾」と同様にその意味内容が話者によってひきうけられてはいるが、その内容がディスコースの前面に位置づけられて、それにもとづいてディスコースが展開することがみとめられず、その意味内容は、ディスコース上は背景にしりぞいてしまっているようなばあいの発話モードをさす。伝統的な意味論で「前提」といわれるものがその典型例にあたる。

(49) わたしは1年まえにタバコをやめたが、体調はかんばしくない。

(49)の発話では前半の「やめた」という述語から、意味内容[わたしは以前喫煙を習慣としていた]という意味内容がひきうけられていることがわかる。

しかし、この発話そのものは、話者のかつての喫煙習慣をめぐって展開するものではないことから、この意味内容は背景にしりぞいている。このような意味内容が、「承認」された意味内容である。

このような発話モード概念にもとづいて、論証的ポリフォニー理論では、アイロニー発話とは、ある意味内容が、否定辞のような、とくにそれをしめす標識なしに、排除モードでディスコースにのせられること、また、否定の発話にあるような、受諾された別の意味内容をそのかわりに提示することのないままそのようにされることであると記述される（Ducrot, 2010）。

(50) きょうは行楽びよりのいい天気だね。

という発言が、悪天候にみまわれた日のあさになされると、これは典型的な批判的アイロニーの事例となるが、このとき話者は、通常の肯定の発話がそうであるように、[きょうは行楽びよりの好天である]という意味内容を受諾せず、排除する。つまり、この意味内容にそって、発話が連鎖し、ディスコースのながれがつくられることを拒否しているのである。[きょうは行楽びよりの好天である]という肯定の意味内容の排除は、すぐうえでみたように、通常は「きょうは行楽びよりのいい天気ではないね」といった通常の（アイロニーではない）否定の発話でも生じることだが、こちらのばあいでは、[きょうは行楽びよりの好天である]という意味内容が排除されると同時に NEG- [きょうは行楽びよりの好天である] が受諾され、ディスコースのながれがきまるが、アイロニーは、このように、受諾される意味内容を欠いた発話であるというのが Ducrot (*ibid.*) の見解である。アイロニーは、したがって、（そのアイロニー発話のながれにそってアイロニーの連鎖がおこらないかぎり）そこでディスコースを停滞させる発話となり、一般には、気まずい雰囲気、苦笑といった状況を派生するが、その理由もこのような発話上の事情によると、本稿筆者はかんがえる。

それでは、3.1. でみた(41)のようなアイロニーは、論証的ポリフォニー理論

ではどのように記述されるのだろうか。

(51)おいしそうな親子丼ですね！ありがとうございます。箸があればなおいいのですが。(=(41))

すでにみたように、この発話がアイロニーとして理解されるのは、食事の必須要素である「箸」を、追加アイテムのようにあつかい、これを「追加の幸福要因」のようにとらえているところである。現に、(51)から「箸があればなおいい」の「なお」を削除したものからは、アイロニー性が大部分消失し、ただ不足しているものをひかえめに要求する発話にしかならない。

(52)おいしそうな親子丼ですね！ありがとうございます。箸があればいいのですが。

つまり、(51)のアイロニー発話では、意味内容「箸があればなおよい」が排除され、このような意味内容がディスコースのながれをつくってゆくことが拒否されている。この状況での自然な発話が「箸をいただけますか」であるとすると、これが(52)のように「箸が必要である」という意味内容であれば受諾されアイロニーではなくなったところである。ところで、「箸があればなおよい」という内容は、そのばの状況を記述する命題としては偽とはならないであろう。しかし、論証的ポリフォニー理論における「受諾」と「排除」は、真の命題としてひきうけるか、偽の命題としてしりぞけるかということについての概念ではなく、すでにのべたように、その意味内容にそってディスコースが展開していくことをひきうけるかどうかということについての概念である。ここでは、「なお」の存在によって、この意味内容は、3.1.でみたように、論証局面「幸福要因の追加 だから 幸福感増加」の具体化としては不合理であるものとして、受諾されず排除され、これにしたがってディスコースのながれがきまることもなくなるのである。このように、論証的ポリフォニー理論で、ある意味内

容を「受諾する／排除する」、というのは、命題内容を真偽によって区別することとおなじではないことに注意が必要である。

本稿筆者のアイロニーについての考察は、大久保（2016）に詳述されているが、以上の議論の要点はつぎのようにまとめられる。

- ・ アイロニーでは、論証局面の不合理な具体化が生じている。
- ・ アイロニー発話の意味内容には、排除モードが付与されており、それにかわる受諾モードの内容が欠如している。

それでは、1章でみた、評価的発話における規範的偏向、2章でみたアイロニーにおける規範的偏向といった現象と、本稿筆者のアイロニー記述などをどのように関係づけて論じることができるだろうか。次章ではそれについてみてみよう。

#### 4. 規範的偏向と評価述語の否定・アイロニー

1章では、規範的評価述語の優位のものが否定されるとそれはその劣位の反意語に意味的にちかづくのにたいし、劣位のものが否定されても、それはその優位の反意語にはちかづかないことをみた。「よい」（優位述語）の否定「よくない」は「わるい」（劣位述語）にちかいが、「わるい」の否定「わるくない」は「よい」にはちかづかない。また、2章では、アイロニーについてWilson(2014)が指摘する規範的偏向を確認し、優位述語による批判的アイロニー（悪天の日に「きょうはいい天気！」）は文脈フリーに成立するが、劣位述語による称賛的アイロニー（好天の日に「きょうは天気わるいね」）は、文脈上そのような想定（天気についての予想）がされていなければ成立しにくいことをみた。本章では、これらの現象をみわたして、規範的評価述語の意味的性質について考察できることを論じたい。

#### 4.1. 評価述語の肯定・否定と発話の受諾・排除

これまでみたように、肯定文と否定文のペアのうち、肯定文では、その意味内容が受諾され、否定文では、そこにふくまれる肯定の意味内容が排除され、否定のそれが受諾される。

- (53) a. この厨房は清潔ですね。  
[この厨房は清潔である] (受諾)  
b. この厨房は清潔ではないですね。  
[この厨房は清潔である] (排除)  
NEG- [この厨房は清潔である] (受諾)
- (54) a. この厨房は不潔ですね。  
[この厨房は不潔である] (受諾)  
b. この厨房は不潔ではないですね。  
[この厨房は不潔である] (排除)  
NEG- [この厨房は不潔である] (受諾)

うえの(53)-(54)は、「清潔／不潔」の規範的評価述語のペアをふくむ発話にむすびついた意味内容と発話モードを列記したものである。これまでの考察から、(53b)(優位評価述語の否定)には実際には規範的偏向が生じ、ここで受諾されている意味内容は、NEG- [この厨房は清潔である]ではなく、[この厨房は不潔である]とかきかえてよい、というのが、発話モードの観点からとらえなおした記述となる。「否定」が発話模式的には「排除」を意味するのであるとすると、このことはつぎのようにいえることができる。

- (55) 優位評価述語の否定による、優位評価述語をふくむ意味内容の排除は、劣位評価述語をふくむ意味内容の受諾をうながす。

これを反映させた発話モード表記が(56)である。

(56) a. ここの厨房は清潔ですね。

[ここの厨房は清潔である] (受諾)

b. ここの厨房は清潔ではないですね。

[ここの厨房は清潔である] (排除)

NEG- [ここの厨房は清潔である] (受諾) →

[ここの厨房は不潔である] (受諾)

直観的な理解のために、従来のポリフォニー理論的なことばづかいにしたがえば、[清潔でない] とのべることは、[清潔である] というこえを排除し、通常同時に NEG- [清潔である] というこえを受諾し、きかせるものであるが、ことに「清潔」のような優位評価述語にかぎれば、その否定 [清潔でない] は、[清潔である] というこえを排除すると同時に、[不潔である] というこえを受諾し、きかせるのである。これが、論証的ポリフォニー理論的観点からみた、規範的偏向の特徴の記述となる。

#### 4.2. 評価述語の規範的偏向とアイロニー

さて、いまアイロニーとして、とても不潔な厨房を(53a)のような発話で批判するという状況をかنگえると、それは以下のように記述できる（記号 ø は要素が存在しないことをしめす）。

(57) ここの厨房は清潔ですね。（アイロニーとして）

[ここの厨房は清潔である] (~~受諾~~) → (排除)

[  
ø  
] (受諾)

Ducrot (2010) にしたがって、(57) のようなアイロニーの論証的ポリフォニ

ー理論による記述を、(56b)のような否定の発話のそれとを比較すると、i) 否定の発話では否定標識に動機づけられて、肯定の意味内容が排除されるが、アイロニー発話では、それをうながす標識がないにもかかわらず意味内容の排除がおこる。ii) 否定の発話では、排除された肯定の意味内容の代替となる否定の意味内容が受諾されるが、排除標識のないアイロニー発話では代替としてしめされる受諾内容が不在である。

他方、2章でみた規範的偏向によると、(57)のような優位評価述語による批判的アイロニー発話は文脈のサポートなしで理解可能であるが、劣位評価述語による以下のような例が称賛的アイロニーとして理解されるためには文脈のサポートが必要である。とても清潔な厨房をまえにした以下の(58)のようなアイロニー発話をかながえてみよう。

(58) ここの厨房は不潔ですね。(アイロニーとして)

〔ここの厨房は不潔である〕~~(受諾)~~ → (排除)

[                   ø                   ] (受諾)

この発話がアイロニーとしてスムーズに理解されるためには、たとえば、先行文脈内で、「ここの厨房は不潔だよ」といった発話があらかじめなされているなど、エコー的解釈が可能な文脈状況が成立している必要がある<sup>16)</sup>。このように(57)タイプの批判的アイロニーが文脈フリーで成立しやすく、(58)タイプの称賛的アイロニーが文脈のサポートを必要とする理由について、2章ではWilson (2014)の説明を紹介し、文脈によるそれ以外の指定がなければ、優位評価述語にみられる意味内容がまずは想定されやすいことから、優位評価の内容をしめして劣位の状況を批判的に揶揄するのが、エコー的解釈になじみやすいということによるものだったが、本稿では、この偏向について、意味ブロック理論および論証的ポリフォニー理論のわくぐみで、もうすこしきめこまかく記述しなおしたい。

さきの、(56b)の否定発話と(57)のアイロニー発話は、ともに〔ここの厨房



は清潔である」という意味内容を排除するという点で共通しているが、優位評価述語の否定である前者では、すでにみたように実質的には、「ここの厨房は不潔である」という意味内容が受諾されており、後者のアイロニー発話には受諾された意味内容が存在しない（そのような意味内容が言語化されていない）。それでは、(57)では否定辞もないのに、なぜ「ここの厨房は清潔である」が排除されるのか。これは、3.1. でみたように、この発話がある論証局面の不合理な具体化であることによる。たとえば、「清潔である」という意味内容は、{頻繁な清掃 だから 清潔} といった論証局面の一部となることができる。(57)がアイロニーであるのは、「ここの厨房」というダイクシス表現にささえられた特定の厨房のもつ属性が、この論証局面の不合理な具体化であるようなばあいには成立する。その意味を言語的に補完してしめすと、たとえば以下になる。

(59) ここの（ゴミだらけ、油よごれまみれの）厨房は、とても清潔ですね。

↑具体化

論証局面 {頻繁な清掃 だから 清潔}

「ここの厨房は清潔である」（排除）

[                    o                    ]（受諾）

論証局面の前件の具体化として、「ゴミだらけ、油よごれまみれ」といった属性が記述されることで論証局面 {頻繁な清掃 だから 清潔} の不合理な具体化がおり、この不合理さによって、この発話の意味内容「ここの厨房は清潔である」は排除される。この発話がアイロニーであるかぎりにおいて、排除された意味内容にかわる受諾内容がしめされることもないのはこれまで何度もみてきたとおりである。いっぽう、「ここの厨房」を、「ここの」が特定する属性にしたがって、その合理的な具体化として記述できるような論証局面をかんがえてみると、それは、(59)にしめした {頻繁な清掃 だから 清潔} とおなじ意味ブロック内にある、{NEG- 頻繁な清掃 だから NEG- 清潔である} と

なるとかながえられる。それは、以下のような否定の発話として実現し、ここでは当然発話のアイロニー性は消滅する。

(60) この（ゴミだらけ、油よごれまみれの）厨房は、清潔ではないですね。

↑具体化

論証局面 {NEG- 頻繁な清掃 だから NEG- 清潔}

「この厨房は清潔である」（排除）

NEG- 「この厨房は清潔である」（受諾）→

「この厨房は不潔である」（受諾）

(60)は、おなじ意味ブロック内で、「この厨房」が合理的に記述されるべきしかたで構成された発話である。これをアイロニー化したものが(59)であり、両者は共通の意味ブロック内の異なる論証局面の具体化として、排除された意味内容を共有しており（(59), (60)の下線部参照）、アイロニーである(59)そのものには受諾された意味内容はないものの、(60)から、合理的にはNEG-「この厨房は清潔である」が受諾されることがしられる。さらに、優位評価述語についてみた性質から、NEG-「この厨房は清潔である」は、「この厨房は不潔である」とよみかえることができる。以上のようにして、優位評価述語をもちいた批判的アイロニー発話は、アイロニーとして本来受諾された意味内容をもっていないものの、おなじ意味ブロック内の別の論証局面の具体化でしめされる受諾された意味内容から、反意誘引による批判的性質をうけとり、そのようなアイロニーとして成立しやすいものになる。アイロニー発話そのものは、反意を誘引しているわけではないが、おなじ意味ブロック内で生じる別の論証局面の具体化が、反意の意味内容を受諾することで、「清潔である」を受諾しないことが「不潔である」を受諾する状況を類推によって誘引する。このことによって、まずはアイロニーといえ反意誘引が典型であるという一般的な理解が生じるとかながえられる。

他方、劣位評価述語による反意誘引型の称賛的アイロニーでは、事態は同様ではない。

(61) ここの（ちりひとつない）厨房は、まったくもって不潔ですね。

↑具体化

論証局面 {ずさんな衛生管理 だから 不潔}

[ここの厨房は不潔である] (排除)

[                    〇                    ] (受諾)

上記が、意味ブロック理論・論証的ポリフォニー理論による反意誘引型称賛的アイロニーの記述である。これに対応するアイロニーではない発話については以下のようになる。

(62) ここの（ちりひとつない）厨房は、不潔ではないですね。

↑具体化

論証局面 {NEG- ずさんな衛生管理 だから NEG- 不潔}

[ここの厨房は不潔である] (排除)

NEG- [ここの厨房は不潔である] (受諾)

(61), (62)は排除される意味内容[ここの厨房は不潔である]を共有し、アイロニーである(61)そのものには受諾された意味内容はないものの、(62)からNEG-[ここの厨房は不潔である]が受諾されていることがしられる。しかし、これまでみたように、劣位評価述語の性質から、意味内容[不潔である]の排除は、かならずしも[清潔である]をみちびくことができない。そこから、劣位評価述語をもちいた反意誘引型の称賛的アイロニーは、優位評価述語による批判的アイロニーと同様のしかたではスムーズに成立できず、文脈のサポートが別途必要になるとかんがえられる。

以上のことをわかりやすくいいなおすと以下のようにいうことができる。「清

潔だ」という優位評価述語による反意誘引型アイロニーでは、おなじ意味ブロック内の別の論証局面にたすけられて、「清潔ではない」が間接的につたえられ、さらに優位評価述語の性質から「清潔ではない」→「不潔だ」をすぐによみとることができるが、「不潔だ」という劣位評価述語による同様のアイロニーでは、「不潔ではない」がつたえられても、劣位評価述語の性質からは、「清潔だ」という意味内容を即座によびだすことができない。そこから後者のタイプのアイロニーの成立のためには、「不潔でない」すなわち「清潔」という解釈をうながす文脈のサポートが必要となるということである。

## 5. 結論

事態の規範的評価にかかわる評価述語の発話内でのふるまいには規範的偏向があり、優位評価述語の否定（「清潔ではない」）はその反意語にあたる劣位評価述語の肯定（「不潔だ」）に意味的に近接するが、劣位評価述語の否定（「不潔ではない」）では同様のことはおこらない。

また、アイロニー発話にも、これと類比できる規範的偏向があり、優位評価述語による批判的アイロニーは、通常文脈フリーで理解可能（不潔であることを「清潔ですね」と揶揄するばあい）であるのに対して、劣位評価述語による称賛的アイロニーの理解には、文脈のサポートが必要である（清潔であることを「不潔ですね」とからかうばあい）。

上記の2つの規範的偏向は、そのままむすびつけて論じることとはできないとはいえ、意味的連関があることはあきらかである。これをただしく論じるために、本稿では、意味ブロック理論と論証的ポリフォニー理論の2つの観点によるアイロニーの記述を導入した。意味ブロック理論によると、アイロニーとはある論証的局面の不合理な具体化によってもたらされるものであり、論証的ポリフォニー理論によると、アイロニー発話では、その意味内容を話者が排除するということが、排除の典型的な標識である否定辞などもなしにおこり、さらに否定発話にみられるように、受諾された否定的意味内容がしめされることもない。しかし、そのアイロニー発話が具体化する論証局面とおなじ意味ブロッ

クにふくまれる別の論証局面を合理的に具体化した非アイロニー発話を参照することにより、排除された意味内容が優位評価述語であるばあい、それがその反意語の劣位評価述語を含む意味内容の受諾に意味ブロック内でむすびつくことがしられる。他方、アイロニー発話において排除された意味内容が劣位評価述語であるばあい、さきにみた評価述語の性質から、劣位評価述語の排除は、そのままでは、反意の優位評価述語の受諾に意味ブロック内でむすびつくことはない。アイロニーにみられる規範的偏向は、以上のようなしくみで、評価述語の規範的偏向とリンクしているにとらえることができる。

## 6. のこされた問題

以上論じたことは、本論でしめした2つの規範的偏向が同根のものであることをしめすためのものであるが、最後に注意すべきことを付言しておきたい。すでにのべたように、アイロニーの規範的偏向について論じた Wilson (2014) も、本稿も、アイロニーにおいて反意誘引を主たる定義ととらえていない。それでも優位評価述語による反意誘引型批判的アイロニー発話が、アイロニー出現の典型とみられることについて、本稿では優位述語による意味内容が排除されることで、同じ意味ブロック内の別の論証局面を参照した反意語の劣位述語による意味内容の受諾が喚起されやすいからであるとした。このことは、「排除」という発話モードが、「否定」と直接むすびつくという発想にもとづくが（〔清潔〕〔排除〕は NEG-〔清潔〕（受諾）（ひいては〔不潔〕（受諾））にむすびつくとする）、「排除」とは、あくまでもその意味内容に即してディスコースが連鎖してゆくことの拒否であることを想起しなければならない、かならずしも否定辞による統語的な「否定」を意味するものではない。

(63) おいしそうな親子丼ですね！ありがとうございます。箸があればなおいしいのですが。(=(41))

↑具体化

論証局面 {幸福要因の追加 だから 幸福感増加}

[箸があればなおいい] (排除)

[ $\emptyset$ ] (受諾)

3.1. でみたとおり、このアイロニー的発話は「幸福要因の追加 だから 幸福感増加」といった論証局面の不合理な具体化であり、ここでは、[箸があればなおいい] という意味内容は排除されている。アイロニーである以上、ここではそれにかわって受諾される意味内容はしめされないが、4.2. 節での議論にしたがって、(63)の論証局面とおなじ意味ブロックに属する別の論証局面とその合理的具体化をかんがえてみると、以下ようになる。

(64) おいしそうな親子丼ですね！ありがとうございます。でも、箸がないとだめですね。

↑具体化

論証局面 {NEG- 幸福要因の追加 だから NEG- 幸福感増加}

[箸があればいい] (排除)

[箸がないとだめ] (受諾)

つまり、(63)がアイロニーとして解釈されるのは、[箸がないとだめ] という意味内容が受諾される事態において、「箸があればなおいい」という発言がされているところである。(64)で受諾される意味内容は排除される意味内容に否定辞を付加することによってできるものではなく、[XだからY] にたいして[NEG-X だから NEG-Y] のようにおなじ意味ブロック内で対になる意味内容である。このような例も、「箸があればなおいい」という称賛的な語調のままのおだやかな依頼によって当然必要なものが準備されていないことを批判するアイロニーではあるが、これを4章で論じたのとおなじしかたで記述するには、本稿でのべたことをさらに精緻に理論化する必要がある。これについては今後の研究でとりくみたい。

## 引用文献

- 阿部宏 (2015) 『言葉に心の声を聞く―印欧語・ソシュール・主観性―』(人文社会学ライブラリー第4巻), 東北大学出版会.
- Carel, Marion (2011a) *L'Entrelacement argumentatif. Lexique, discours et blocs sémantiques*, Paris, Éditions Honoré Champion.
- Carel, Marion (2011b) « Ironie, paradoxe et humour », In Garcia, M.-D. V., *Humour et crises sociales. Regard croisés France-Espagne*, Paris, L'Harmattan, 57-75.
- Ducrot, Oswald (1973) *La prevue et le dire*, Tours, Mame.
- Okubo, Tomonori (2008) « La prédication comme orientation discursive : le cas de la négation descriptive au prédicat adjectival » 『関西大学文学論集』58(3), 1-28.
- 大久保朝憲 (2016) 「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲語法」『フランス語学の最前線4』(東郷・春木(編)), 303-339, 東京, ひつじ書房.
- Wilson, Deidre (2014) "Irony, hyperbole, jokes and banter" in J. Blochowiak, C. Grisot, S. Durrleman-Tame, C. Laenzlinger (eds.), *Papers dedicated to Jacques Moeschler*, Genève. URL: [www.unige.ch/lettres/linguistique/moeschler/Festschrift/Festschrift.php](http://www.unige.ch/lettres/linguistique/moeschler/Festschrift/Festschrift.php)
- Wilson, Deidre & Dan Sperber (2012), *Meaning and Relevance*, Cambridge, Cambridge University Press.

## 注

- 1) これらが評価的発話になるケースとしては、たとえば、「大統領である」「民主党に所属している」が比喩的な述語として使用されたばあいであてはまる。(1)であれば、実際には大統領ではないが事実上国家をうごかしているような人物についての、また(2)であれば、正式な黨員ではないが、政治思想的にも、人脈的にも、事実上民主党黨員同様とみなされているという人物についての話者による比喩的な理解をのべる発話であるようなケースがそれにあてはまる。
- 2) これについては、19世紀の合衆国で社会的・法的にさだめられていた One-drop rule (白人の血に一滴でも黒人の血がまじれば、それは「黒人」であるとするもの) が参照されているということもよくいわれるが、まさにこのルールこそが人種主義的偏向の典型であることにも気づく必要がある。
- 3) ここでのべた「評価的発話」と「確認的発話」の区別は、論証的ポリフォニー理論 *Théorie argumentative de la polyphonie* (Carel, 2011a ほか) で発話の構成要素として提案される「トーン ton」の概念と対照させ、評価的発話は「話者トーン」による発話、確認的発話は「世界トーン」による発話であるということもできる。本論文は、論証的ポリフォニー理論の基本的なわくぐみに依拠したものではあるが、トーン概念を論の中心におくものではないので、あえて導入せず、二種類の発話の型とした。ただし、トーンのタイプがほかにも提案されているように、ここでももちろん、発話には評価的・確認的以外

のものがあることはいうまでもない。

- 4) 「のぞましさ」の概念についての言語学的重要性については、阿部(2014)をはじめとする一連の研究で力説されている。本稿も、規範性をめぐる述語の性質が、発話の意味的ふるまいにおおきな影響をあたえるという点で、基本的には阿部とおなじたちばにたつ。
- 5) 「たかい／ひくい」は、これらの語がものの性質などを比喩的にあらわす用法では、規範的評価語となり「レベルが {たかい／ひくい}」のように規範性が一義的に指定される。
- 6) 確認的発話にも、文脈によって規範性が生じることがあるが、これについては後述する(14. 参照)。
- 7) « [...] la négation n'agit pas de façon symétrique sur les deux termes d'un couple d'adjectifs antithétiques. Prenons le couple : (gentil, méchant). L'énoncé *Pierre n'est pas gentil* est très proche souvent de *Pierre est méchant*. En revanche, *Pierre n'est pas méchant* est très loin d'être équivalent à *Pierre est gentil*. »
- 8) ただし、日本語の論争的否定で、否定による偏向の解消をしめすためには、形容詞述語をメタ言語化する助詞「は」のはたらきが重要である。これがなければ(13)の日本語訳にせよ、(15)にせよ、論争的否定が偏向を解消する例となるかどうかは微妙な問題となる。
- 9) Ducrotの議論では、明示的にそのようにいわれてはいないが、実際にしめされている例は規範的評価述語のみである。
- 10) 注1 参照。
- 11) “[...] the most common use of irony is to criticise or complain when a situation, event or performance does not live up to some norm-based expectation (politicians are *supposed* to tell the truth; friends *ought not* to gossip behind our backs). Only in special circumstances can irony be used to praise or reassure, or to point out that some proposition lacking in normative content is false. So when a friend lets one down, it is always possible to say ironically, *She's so reliable*, but when a friend lives up to her promises, it is only possible to say ironically, *She's so unreliable*, if some prior doubt about her reliability has been entertained or expressed.”
- 12) このとき、(34)はかならずしも規範的評価発話である必要はない。つまり「ながい」ことが文脈的にのぞましいものとしていわれているかどうかということは、アイロニーの成立に直接影響をおよぼすことではない。
- 13) The echoic account provides a simple and plausible explanation. Norms are socially shared ideas about how things should be. We are all aware that people should be kind, helpful, stylish, trustworthy, politicians should not lie, actions should achieve their goal, the weather should be good, and so on. So when a particular event or action fails to live up to the norm, it is always possible to say ironically *That was helpful*, *How elegant*, *Well done*, *Lovely weather* and so on, and be understood as echoing a norm-based expectation that should have been met. By contrast, it is not always possible to say ironically, *How unhelpful* when someone has been kind, *You look terrible* when someone



looks stunning, [...] and so on. For irony to succeed in these cases, there must have been some manifest doubt or suspicion that the person in question might be unhelpful, look terrible or fail to tell the truth, and so on. Otherwise there will be no identifiable thought that the speaker can be understood as ironically echoing. The echoic account predicts that this normative bias is inherent to irony and should therefore be present from the outset [...].

- 14) 以下の議論は、Carel (2011b) の論旨を、本稿の議論のながれにしたがってまとめなおしたものである。
- 15) Carel の「テキスト機能」には「つよさ」の概念はなく、ここが「発話モード」概念における主たる修正点である。またここでいう「話者の態度」とは、厳密には、現実の存在者としての話者の心理に依拠した態度のことではなく、当該の発話が適切に成立するために、想定される話者がその意味内容についてとるはずの態度のこと、と理解されたい。
- 16) 「たしかに、ここの厨房は不潔ですね。」の「たしかに」のように、エコー的解釈であることをしめす標識などがあればなお理解されやすくなる。